

平成24年度採択プログラム 事後評価調書

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	京都大学	整理番号	K02
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) (やまぎわ じゆいち) 氏名・職名 山極 壽一 (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) (きたの まさお) 氏名・職名 北野 正雄 (京都大学理事(教育担当)・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) (いしだ とおる) 氏名・職名 石田 亨 (京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻・教授)		
4. 類型	K <複合領域型(情報)>		
5.	プログラム名称	デザイン学大学院連携プログラム	
	英語名称	Collaborative Graduate Program in Design	
	副題		
6. 授与する博士 学位分野・名称	博士(総合学術)、もしくは、博士(情報学)、博士(教育学)、博士(工学)の学位記に博士課程教育リーディングプログラムを修了した旨を付記。		
7. 主要分科	(① 情報学) (② 機械工学) (③ 建築学) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	経営学、心理学		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
	ソフトウェア、計算機システム・ネットワーク、メディア情報学・データベース、知能情報学、知覚情報処理・知能ロボティクス、感性情報学・ソフトコンピューティング、図書館情報学・人文社会情報学、認知科学、生産工学・加工学、設計工学・機械機能要素・トライボロジー、機械力学・制御、知能機械学・機械システム、建築構造・材料、建築環境・設備、都市計画・建築計画、建築史・意匠、経営学、商学、社会心理学、教育心理学、実験心理学		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	教育学研究科教育学環専攻、工学研究科建築学専攻、工学研究科機械理工学専攻、工学研究科マイクロエンジニアリング専攻、工学研究科航空宇宙工学専攻、情報学研究科知能情報学専攻、情報学研究科社会情報学専攻、情報学研究科数理工学専攻、情報学研究科システム科学専攻、情報学研究科通信情報システム専攻、経営管理教育部経営管理専攻		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	京都市立芸術大学大学院美術研究科、日本電信電話株式会社、日本電気株式会社、三菱電機株式会社、パナソニック株式会社、野村総合研究所、デザインイノベーションコンソーシアム(会員に企業61社を含む)		

14. プログラム担当者の構成 計 40 名					
外国人の人数	0	人	[0.0 %]	女性の人数	2 人 [5.0 %]
プログラム実施大学に属する者の割合 [77.5 %]					
プログラム実施大学に属する者			31	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			30	そのうち、大学等以外に属する者	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
(プログラム責任者) 北野 正雄	キタノ マサオ		京都大学・理事(教育担当)・副学長	電磁波工学 博士(工学)	プログラム責任者として学位プログラムの 全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 石田 亨	イシダ トオル		情報学研究科・社会情報学専攻・教授	人工知能、 コミュニケーション 博士(工学)	プログラムコーディネーターとして本プ ログラムの全体を総括
楠見 孝	クシミ タカシ		教育学研究科・教育学環専攻・教授	認知心理学 教育心理学 博士(心理学)	協議会、心理学領域
齊藤 智 (H28. 4. 1交替)	サイノウ サトル		教育学研究科・教育学環専攻・教授	認知心理学 博士(教育学)	協議会、心理学領域
林 康裕	ハヤシ ヤスヒロ		工学研究科・建築学専攻・教授	都市・建築物 保全再生 博士(工学)	協議会、建築学領域
神吉 紀世子	カンギ キヨコ		工学研究科・建築学専攻・教授	都市・地域計 画 博士(工学)	協議会、建築学領域
三浦 研 (H28. 5. 10追加)	ミウラ ケン		工学研究科・建築学専攻・教授	建築計画 博士(工学)	協議会、建築学領域
榎木 哲夫	エノキ テツオ		工学研究科・機械理工学専攻・教授	システム工学 博士(工学)	協議会、機械工学領域
西脇 眞二	ニシワキ シンジ		工学研究科・機械理工学専攻・教授	最適設計 Ph. D.	協議会、機械工学領域
富田 直秀	トミタ ナオヒデ		工学研究科・機械理工学専攻・教授	医療工学 博士(医学) 博士(工学)	協議会、機械工学領域
小森 雅晴 (H30. 4. 1追加)	コモリ マサル		工学研究科・機械理工学専攻・教授	機構学、 機械設計 博士(工学)	協議会、機械工学領域
松原 厚	マツハラ アツシ		工学研究科・マイクロエンジニアリング専攻・ 教授	生産工学、 加工学 博士(工学)	協議会、機械工学領域
泉田 啓	イズミタ ケイ		工学研究科・航空宇宙工学専攻・教授	航空宇宙力学 博士(工学)	協議会、機械工学領域
藤本 健治 (H30. 4. 1追加)	フジモト ケンジ		工学研究科・航空宇宙工学専攻・教授	制御工学 博士(工学)	協議会、機械工学領域
西田 豊明	ニシダ トヨアキ		情報学研究科・知能情報学専攻・教授	人工知能 博士(工学)	協議会、情報学領域
黒橋 禎夫	クワハシ ユウオ		情報学研究科・知能情報学専攻・教授	自然言語処理 博士(工学)	本プログラムの運営副総括、情報学領域

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
吉川 正俊 (H29. 4. 1交替)	ヨシカワ マサトシ		情報学研究科・社会情報学専攻・教授	データサイエンス 博士(工学)	協議会、情報学領域
守屋 和幸	モリヤ カズユキ		情報学研究科・社会情報学専攻・教授	生物圏情報学 博士(農学)	協議会、情報学領域
太田 快人	オウダ コト		情報学研究科・数理工学専攻・教授	システム制御理論 博士(工学)	協議会、情報学領域
田中 利幸	タナカ リシキ		情報学研究科・システム科学専攻・教授	情報理論、 情報数理 博士(工学)	協議会、情報学領域
佐藤 高史	サトウ タカシ		情報学研究科・通信情報システム専攻・教授	集積回路工学 博士(情報学)	協議会、情報学領域
守倉 正博	モリクラ マサヒロ		情報学研究科・通信情報システム専攻・教授	伝送デバイス工 学 博士(工学)	協議会、情報学領域
松井 啓之	マツイ ヒロユキ		経営管理研究部・教授	計画理論 ゲーミング・シミュ レーション 博士(工学)	本プログラムの運営副総括、経営学領域
山内 裕	ヤマウチ ユウカ		経営管理研究部・准教授	組織論、経営 学 Ph. D.	協議会、経営学領域
多々納 裕一 (H27. 10. 1交替)	タタノ ヒロカズ		防災研究所・社会防災研究部門・教授	防災経済工 学、災害リスク ガバナンス 博士(工学)	協議会、情報学領域
中村 裕一 (H30. 4. 1交替)	ナカムラ ユウイチ		学術情報メディアセンター・教授	情報デバイス 博士(工学)	協議会、情報学領域
塚田 章	ツカダ アキラ		京都市立芸術大学大学院美術研究科・教授	工業デザイン、 芸術学 学士(美術)	協議会、大学間連携、デザインの可視化
澤田 宏 (H30. 4. 1交替)	サワタ ヒロシ		日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学 基礎研究所 協創情報研究部・部長	信号処理、 機械学習 博士(工学)	協議会、産学官連携プロジェクトと人材 育成への協力
山田 敬嗣	ヤマタ ケイジ		日本電気株式会社 中央研究所・理事	シブティック 情報システム 博士(工学)	協議会、産学官連携、問題解決型学習と リーダー育成への協力
田中 健一	タナカ ケンイチ		三菱電機株式会社開発本部・技術統轄	ロボティクス 修士(工学)	協議会、産学官連携、問題解決型学習へ の課題提供、デザイン人材育成への協力

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
梶本 一夫	カガモト 一夫		パナソニック株式会社 イノベーション戦略室 戦略企画部 主幹	ソフトウェア・キチク チャイロシステム、ソフ トウェア開発フェ ス・修士(工 学)	協議会、産学官連携、問題解決型学習へ の課題提供、実践教育プログラムの推進
三浦 智康 (H29. 7. 1交替)	ミウラ トモヤス		株式会社 野村総合研究所・理事	経営戦略、IT 戦略 修士(工学)	協議会、産学官連携、フューチャーセン ターの企画運営に協力
松田 晃一	マツダ 晃一		独立行政法人情報処理推進機構・顧問	ソフトウェア工学 博士(工学)	協議会、産学官連携、デザイン方法論確 立への協力
上田 誠 (H29. 4. 1交替)	ウエダ マコト		京都市産業観光局・局長	都市経済、産 業政策・学士 (総合政策科 学)	協議会、地域産業や地元企業を含む産学 官連携の推進
谷脇 康彦	タニワキ ヤスヒコ		総務省 政策統括官(情報セキュリティ担当)	情報通信 学士(経済学)	協議会、産学官連携体制の整備と運用へ の協力、情報通信行政の知見の提供
中小路 久美代 (H28. 4. 1追加)	ナカミチ キミヨ		大学院横断教育プログラム推進センター・デザ イン学リーディング大学院 ・特定教授	ルッジ インタラクシ ョンデザイン Ph. D.	デザイン学講義設計担当、国際連携推進 担当、デザインファブリケーション拠点 設計・整備担当、デザイン学共通科目 「デザイン構成論」担当、デザイン学共 通実習科目「問題発見型/解決型学習」 担当
川上 浩司 (H28. 4. 1追加)	カガミ ヒロシ		大学院横断教育プログラム推進センター・デザ イン学リーディング大学院 ・特定教授	システムデザイン論 博士(工学)	デザインイノベーションコンソーシアム 担当、デザインファブリケーション拠点 の運営推進、デザイン学領域科目「数理 とデザイン」担当、デザイン学共通実習 科目「問題発見型/解決型学習」担当
十河 卓司 (H28. 4. 1追加)	ジゴウ タクシ		大学院横断教育プログラム推進センター・デザ イン学リーディング大学院 ・特定教授	デザインインフォ ムエーション 博士(情報学)	デザインイノベーションコンソーシアム 担当、デザイン学共通実習科目総括、デ ザインイノベーション拠点の運営推進、 主催イベント「デザインスクールin沖 縄」担当、デザイン学共通実習科目「問 題発見型/解決型学習」・「オープンイ ノベーション実習」担当
佐藤 彰洋 (H30. 4. 1交替)	サトウ アキヒロ		情報学研究科・数理工学専攻・特定准教授	経済情報学、 応用データ社会 科学 博士(情報科 学)	デザイン学共通スキル科目担当、デザ イン学共通実習科目「問題発見型/解決 型学習」担当、情報学領域
北 雄介 (H28. 4. 1追加)	キタ ユウスケ		大学院横断教育プログラム推進センター・デザ イン学リーディング大学院 ・特定講師	建築・都市デ ザイン論 博士(工学)	「デザイン学論考」の出版担当、プログ ラム広報担当、デザインイノベーション 拠点設計・整備担当、主催イベント「デ ザインスクールinアジア」担当、デザ イン学共通実習科目「問題発見型/解決 型学習」担当

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成30年度は提出日現在))

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 *(今後の募集予定: 有・無)	
プログラム募集定員数	—	15	20	20	20	20	20	
① 応募 学生 数	—	27	28	23	27	23	19	
	うち留学生数	—	0	3	7	3	7	
	うち自大学出身者数	— (—)	18 (0)	21 (1)	10 (1)	12 (0)	9 (0)	7 (0)
	うち他大学出身者数	— (—)	9 (0)	7 (2)	13 (6)	15 (3)	14 (7)	12 (6)
	うち社会人学生数	— (—)	5 (0)	2 (0)	6 (2)	3 (1)	3 (1)	9 (4)
うち女性数	— (—)	9 (0)	8 (1)	8 (4)	5 (2)	2 (0)	9 (3)	
② 合格 者数	—	13	15	18	23	22	19	
	うち留学生数	—	0	2	7	3	7	
	うち自大学出身者数	— (—)	8 (0)	12 (1)	8 (1)	10 (0)	8 (0)	7 (0)
	うち他大学出身者数	— (—)	5 (0)	3 (1)	10 (6)	13 (3)	14 (7)	12 (6)
	うち社会人学生数	— (—)	3 (0)	1 (0)	5 (2)	3 (1)	3 (1)	9 (4)
うち女性数	— (—)	4 (0)	3 (0)	5 (4)	5 (2)	2 (0)	9 (3)	
③ ②の うち 履修 生数	—	13	15	18	23	22	19	
	うち留学生数	—	0	2	7	3	7	
	うち自大学出身者数	— (—)	8 (0)	12 (1)	8 (1)	10 (0)	8 (0)	7 (0)
	うち他大学出身者数	— (—)	5 (0)	3 (1)	10 (6)	13 (3)	14 (7)	12 (6)
	うち社会人学生数	— (—)	3 (0)	1 (0)	5 (2)	3 (1)	3 (1)	9 (4)
うち女性数	— (—)	4 (0)	3 (0)	5 (4)	5 (2)	2 (0)	9 (3)	
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	—	2.08倍	1.87倍	1.28倍	1.17倍	1.05倍	1.00倍	
充足率 (合格者数/募集定員)	—	87%	75%	90%	115%	110%	95%	

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成30年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成30年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】

国際社会は今、温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口など複合的な問題の解決を求めている。そこで本プログラムでは、異なる分野の専門家との協働によって「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインできる博士人材の育成を提案する。またそのために、情報学や工学の基礎研究を結集し、複雑化する問題を解決するための、新たなデザイン方法論を構築する。これによって、Cyber(情報学など)とPhysical(工学など)の専門家が、経営学、心理学、芸術系の専門家と協働し問題解決が行えるよう教育を行う。要するに専門家の共通言語としてデザイン学を教育し、社会を変革する専門家を育成する。こうした人材を、ジェネラリストを意味する「T字型人材(T shaped people)」と対比させ、専門領域を超えて協働できる突出した専門家という意味を込めて「十字型人材(+ shaped people)」と呼び、本プログラムにより養成すべき人材像とする。

こうした人材を育てるために、5つの専門領域(情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学)の協力によって、俯瞰力と独創力を育むデザイン学の学位プログラムを構成する。学生は俯瞰力を鍛えるために、博士前期課程でデザイン学の共通科目と領域科目を履修し、一般性のあるデザイン理論とデザイン手法を学ぶと共に、専門に根差した教育を受ける。さらに博士後期課程では、副領域科目を履修すると共に、海外やフィールドでのインターンシップを経験し視野を広げる。一方、独創力を培うために、博士前期課程で、異なる専門領域の学生と共に問題発見型学習(FBL: Field-Based Learning)や問題解決型学習(PBL: Problem-Based Learning)に取り組む。博士後期課程では、実問題を解決するオープンイノベーションのマネジメントを経験した後、社会の大きな課題に挑戦する産学官連携のリーディングプロジェクトに参加し、複数アドバイザー制度の下で博士論文をまとめる。

【特色】

本プログラムでのデザイン概念は、意匠を意味するものではなく、「与えられた環境で目的を達成するために、様々な制約下で利用可能な要素を組み合わせて、要求を満足する人工物を生み出すこと」を意味する。ここでの人工物は製品を表すのではなく、社会のシステムやアーキテクチャを意味する。仮に、環境、目的、制約、要求などを定式化することができれば、情報学や工学の基礎理論は力を発揮するはずである。

しかし、人や社会をデザインの対象とするには、デザイン学を先導し構造物から環境のデザインへと進化を遂げた機械工学や建築学に学ぶとともに、経営学、心理学、芸術系の協力を得ることが必要である。本プログラムの強みは、京都大学の情報学研究科、工学研究科、教育学研究科、経営管理大学院、並びに京都市立芸術大学が連携し、デザイン学の教育を担当することである。しかしながら、デザインの対象領域は防災、医療などを含むさらに広い領域となる。また、社会の実問題を大学だけで解くことはできない。そのため、リーディングプログラムの実施組織を3層構成とする。即ち、デザイン学の5年一貫教育を担当する「デザイン学大学院連携プログラム」(情報学、建築学、機械工学、心理学、経営学)、デザインの対象領域と協業する「デザインスクール」(防災学、農学、看護学、医学など広範な専門領域を含む)、デザインの主体が結集する「デザインイノベーションコンソーシアム」(国内外の企業、非営利団体、自治体など)からなる3層の連携体制を構成する。こうした連携の推進を目的として、本学の吉田、桂、宇治キャンパスと京都市立芸術大学のハブとなる「デザインイノベーション拠点」を設立し、リーディング大学院を可視化する。さらに、本拠点を産学官により運営し、リーディングプロジェクトや問題発見型/解決型学習を常時社会に開放する。このように、リーディングプログラムを対外的にオープンにし、社会と共に教育研究を行う姿勢を広く世界に伝える。

【優位性】

我が国では過去10年間に、専門領域に特化したデザイン専攻(機械システムデザイン専攻や環境デザイン専攻など)が多数生まれてきた。既存専攻が、自らの技術を社会に適用しイノベーションを起こすという意思表示である。これに対し本プログラムは、我が国で初めて、専門領域に特化しない一般性のあるデザイン学博士教育を行うもので、欧米を含む世界的な潮流とも合致し、かつ十分に競争力を持つものである。また、国際連携では、学生に多様な交流の機会を提供するために、京都大学が中心的役割を担う「日英産学連携スキーム(RENKEI)」を活用し、英国大学とデザイン領域でのマルチラテラルな交流を行う。さらに、それを雛形として、世界のデザインスクールと連携するスキームの実現を図る。一方、産学官連携では、既に多数の企業が参加する京都大学工学桂会や京都大学ICT連携推進ネットワークを母体に、デザインイノベーションコンソーシアムを形成する。地域の産業界や研究機関が結集する京都リサーチパークが全面的に協力していることも、本プログラムの優位性を強化するものである。

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

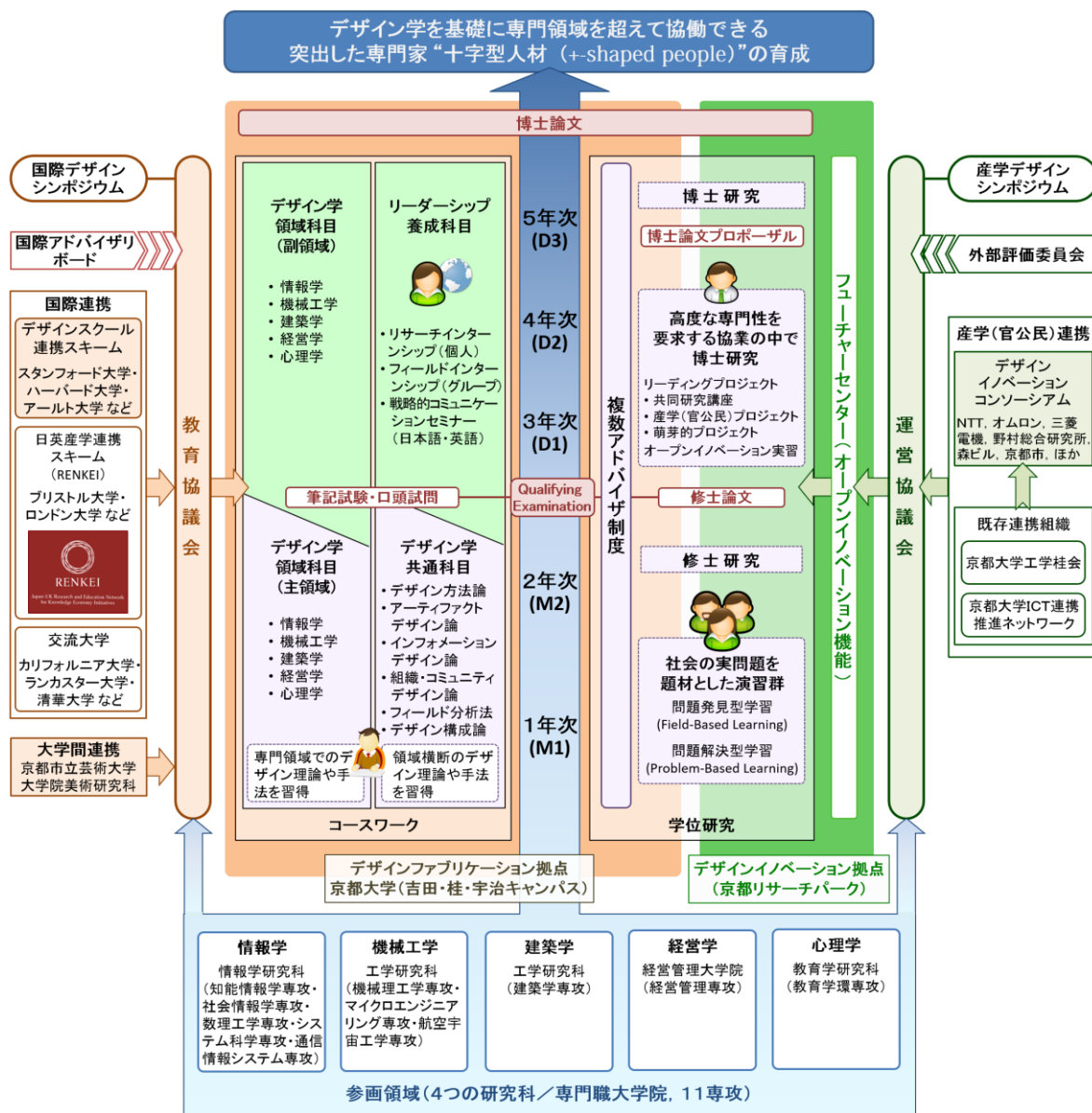


図 1: 学位プログラムの概要と組織構成

本プログラムは、以下の特徴を備える。

- ・ 情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学を結集した「デザイン学共通科目」と「デザイン学領域科目（主領域・副領域）」から成る体系的な科目設計、並びにそれに基づく教科書シリーズの発刊
- ・ 専門領域を超えた学生チームによる「問題発見型・解決型学習（FBL/PBL）」。
- ・ 国際連携ネットワークに支えられた「リサーチインターンシップ（個人）」による国際的研究活動。
- ・ 現場の教育力を活用する「フィールドインターンシップ（グループ）」による国際的実践活動。
- ・ 社会の実問題を扱う「リーディングプロジェクト」の中で複数アドバイザー制の下での博士研究。
- ・ 60 余社が参加する「デザインイノベーションコンソーシアム」による産学官連携の人材育成。
- ・ オープンイノベーション機能を有する「デザインイノベーション拠点」をハブとした産学官連携
- ・ 汎用性の到達度を測る「デザインイノベータインデックス」とルーブリックによる質保証。

プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

【質評価の方法】

本プログラムは「専門的知識と汎用的能力を備え、異なる分野と連携し突出した実践力を持つ博士人材」の養成を目的とする。その質評価に、以下の2つの手法を考案した。

第一は、プログラム全体の質保証の指標である「デザインイノベータインデックス (Design Innovator Index)」である。これは、産業界ならびに学生の視点からの評価であり、産業界が求める能力に対し学生の達成度を測り、プログラム全体の質保証の指標としている。履修者が獲得すべき能力として、インテリジェンス、パーソナリティ、エンゲージメント、ガバナンスの計24項目の能力指標と定め、学生の申告に基づき能力伸張を測定している。履修者に対する5年間の調査の結果、学年進行とともに、特にエンゲージメントとそれを支えるパーソナリティを中心に履修者の自己評価が上昇している。

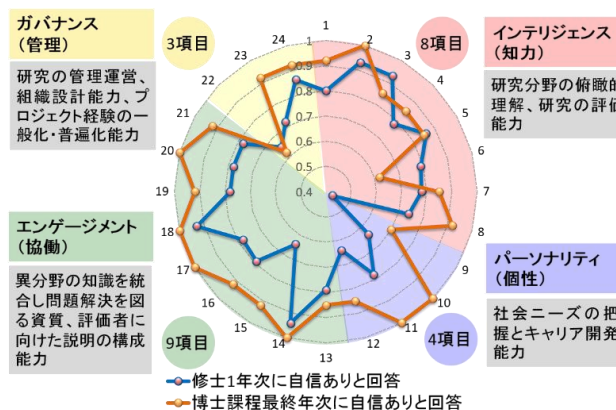


図2: デザインイノベータインデックス

第二は、履修者個人々の質保証のためのルーブリック指標である。これは、評価基準と到達度のマトリクスで構成される多面的・多段階的評価基準で、汎用力に関わる各履修者の長期的な学修成果を把握し、評価結果を教育・学修の質の改善に活用することを目的とする。プログラムの正課だけでなく、正課外の補助カリキュラムも含むプログラム全期間におよぶ履修者のワークを評価するもので、2017年度の修了生については全員が全項目の基準を満たしていることを確認した。

【履修者の博士研究と進路】

2017年度末に5年次の履修者に対し、個別にインタビューを行い、異なる専門領域やコンソーシアム企業との交流が履修者の博士研究や進路に与えた影響を調査した。その結果、履修者が、カリキュラム内外の活動を通して異分野の教員や企業専門家と自発的に共創の機会を作り出し、博士研究やキャリアパスの展開に有効に活用したことが明らかとなった。

例えば博士研究では、情報学の履修者が機械系の企業専門家とのオープンイノベーション実習の成果を博士研究に組み込む、心理学の履修者が副専攻の教員と共同研究し情報学の会議で論文を発表する、情報学の履修者が心理学研究室のゼミに定期的に参加し自らの研究を持ち込み議論する、学会で出会った他大学の教員に共同研究を持ちかけ共著の国際会議論文を発表する、ワークショップを共にした他大学の教員の協力を得て起業する、などの事例がある。

一方、履修者の進路は多様で、アカデミアを希望する者(教員とコミュニケーターを含む)は40%、企業(研究所と事業・コンサルを含む)は54%、起業が6%である。異領域を学ぶことが博士研究のテーマに影響を与えた履修者は40%に上る。また、コンソーシアム企業との交流が、履修者の職業観に大きな影響を与え、様々な職種の選択を促したことが分かる。

さらに、プログラム活用の類型と進路の関係を調査した。「機会活用型」は、提供される機会を活用し社会や海外などに体験を広げていくもので、アカデミア志向の履修者が多い。「専門領域拡張型」は、専門を深めつつ周辺領域との接点を広げていくもので、企業研究所への就職が多い。「クロスボーダー型」は、研究領域を横断するテーマに挑戦するもので、企業の事業部門やコンサル部門に進む者が多い。「キャリアパス開拓型」は、企業や異分野と活発に接し視野を広げていくもので、様々な進路に分かれ、起業した者もいる。

【外部の評価】

産学官の委員から構成される外部評価では、「従来のデザイン・リテラシー教育指向的なアプローチに対して、よりホリスティックで理論的なデザイン・コンピテンシー教育を指向する取組みである」「実学的要請を受けつつも、分野横断的なデザイン学の体系化に成功し、グローバルリーダーを育成する学位プログラムを構築している」という評価を得ている。また、本プログラムの活動と評価手法をまとめた記事は、IEEEの機関誌(*IEEE Computer*)に採択された。このことは、本プログラムの取り組みが国際的な評価に耐えるものであることを示している。

プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

【教育研究組織の再編】

京都大学第3期中期目標・中期計画（平成28年～33年度）、および総長による京都大学の改革と将来構想（WINDOW構想）に、学際的な研究の推進や機動的・効果的な組織改編を通じた異分野融合による新分野創成を推進するために、博士課程教育リーディングプログラムを活用することが明記されている。具体的には、プログラムの教育と学位の質保証を担い、大学院改革を進めるための新組織「大学院横断教育プログラム推進センター」が、2018年4月に、総長と教育担当理事の下に新設された。センター内に設けられた大学院横断教育プログラム運営委員会は、プログラム代表者以外の者が過半数となるよう第三者的視点を確保して教育の質保証を行う。本センターにリーディングプログラムの運営主体が置かれ、参画研究科が責任を持ってその運営に協力する枠組みを整え、大学院改革を推進するための全学的実施体制が構築されている。

また、国際高等教育院を中心に大学院共通・横断教育の見直しと充実が図られており、本プログラムにおいてもデザイン学共通科目を大学院横断科目として提供し、全学への定着を進めている。

【産学官連携による人材育成】

本プログラムが中心となり、産学官連携による人材育成を目的とした「デザインイノベーションコンソーシアム」を2014年3月に設立した。以来、大学が持つ知のネットワークやデザイン理論・手法などの専門性と、産官が持つ社会の実問題や実践力が交わる場として発展してきている。コンソーシアムの運営は企業と大学からの約半数ずつの理事・推進委員によって行われ、参加会員からの会費と収益事業を財源に運営を行っている。さらに、産学官の協力者からなるプロフェッショナル・ネットワークをコンソーシアム内に設けた。その構成員は、現在および過去の本プログラムの教員、コンソーシアムの理事・委員、主要な企業会員が推薦するフェローなど数十名であり、国内外に協力の輪が広がっている。

コンソーシアムは支援期間終了後も継続して、本プログラムと連携を図ることが2018年5月の総会において決議された。具体的には、コンソーシアムにより、履修者への経済的支援やプロフェッショナル・ネットワークを活用した講演・講義を行い、産学官が連携した人材育成を推進する。

また、産学官のハブとして機能してきた「デザインイノベーション拠点」は、全学共用施設として維持し、学学連携、産学連携、産産連携のオープンイノベーションを推進することとした。これは、2017年6月に京都大学が指定国立大学法人とされたことを受け、「新たな知の創造、イノベーションの確立、未来社会への指針を示すための取り組みを実行」する一環であり、デザインイノベーション拠点を、これからも、地域における知の拠点として多様な利用者が交流する場として活用していく。

【学外への波及効果】

本プログラムでは、国内外の教育・研究機関と連携し、デザイン学の新しい教育カリキュラムを構築する努力を行ってきた。得られた知見を広く社会と共有するために、新規開講した主要科目に対応する教科書を、「京都大学デザインスクール・テキストシリーズ」として順次発刊している。

また、共同でデザインワークショップを実施してきた他大学にも波及効果が見られる。琉球大学では、工学部の学科再編を機に、学部共通科目としてワークショップを導入する。同様に、香港バプティスト大学では、学部の4年制移行を機に、デザインワークショップを一般教育に導入する。これらの他大学への波及効果は、新しい教育を目指す長期にわたる協働の成果である。